

古アイスランド語サガ, *Hrafnkels Saga Freysgoða* の主文における語順の倒置について

井田 琇穂

1

先に発表した論文「古アイスランド語サガ, *Hrafnkels Saga Freysgoða* における関係詞節について」の中で指摘したが, 関係詞節の先行詞が主文 (又は主節 [main clause]) での主語の場合, その主文の語順が倒置される例が14例あった。¹ その中の一例を次に引用する。以下, *Hrafnkels Saga Freysgoða* を *HSF* と略す。

HSF 09919-20: þessa leið fara þeir einir, er kunnungastir eru
 This road go they alone, who the most familiar are
um Fljótsdalsheiði.
about Fleetdale hundred.²

(They alone used this road who know their way about in Fleetdale hundred.)

この例では “þeir einir” が主文の主語で, “er” 以下の節の関係詞節が主語の “þeir einir” を修飾する。“fara” が主文の述語動詞で, “þessa leið” がその述語動詞の目的語である。この場合, 主文の語順は倒置されている。

関係詞節を従える主文の主語の文末へのこのような移動については, Heusler (1964: § 518) の考察が既にある。従節が後続する軽い要素 (主語)

を文末へ移動させる現象として、彼はこの現象を説明する。

主文での平常の語順は「主語＋述語動詞」である。述語動詞が主語の前の位置に出る現象（「述語動詞＋主語」）を語順の倒置と言う。古アイスランド語の散文の主文で、語順の倒置は、具体的にどのような場合に発生するかを、本論文で扱いたい。上に見た関係詞節付きの主語の場合の語順の倒置は、古アイスランド語散文の語順の倒置現象の一部にしかすぎない。

以下、古アイスランド語散文の主文での語順の基本形を最初に扱い、次に、その基本形からの変化としての語順の倒置を扱う。拙論は上記、前論文の内容を補う事を一部の目的とするが、同時に古アイスランド語の語順（その一部としての語順の倒置）とを全面的に扱う独立した論文である。

2

この節では、古アイスランド語散文の主文での語順の基本形を、Kress (1982) に従って略述する。この際、その記述を Heusler と Haugen とで補う。古アイスランド語の韻文では、韻律の関係で語順は自由である（規則がないに等しい）が、散文では規則に従う（Heusler: § 502）。

Kress の立場は、“Valenz”（結合価）を理論の中心に据える依存関係文法 (Dependenzgrammatik) である。この文法では、文の中の述語動詞に、述語動詞以外の他の要素が依存していると考ええる。Kress は、ドイツでの依存関係文法の理論の展開の上に彼自身の文法の枠組みを作っている。³

Kress (§ § 636-641) は、主文での語順を以下のように六つに分けている。

(1) 文頭の位置にくる語は、項(Pol)が一つの場合は「P1+V」（P1 は Pol1,

VはVerbの略である)となる。P1には、P1N (= Nominative), P1A (= Akkusativ), P1D (= Dativ), P1G (= Genitiv), P1Präp (= ein Nomen mit Präposition)が来る。例えば、次の例がある。

Solin skin. (この例は Kress [§ 636]による。)

The sun shines.

(The sun shines.)

P1N 以外の要素 (P1A, P1D, P1G, P1Präp)が文頭に来る場合は、非人称構文の場合である。(古アイスランド語では非人称構文の用例が大変多い事をここで指摘するが、今回は、これ以上詳論はしない。)

(2) 主文の2番目の位置には定動詞 (finite flektierte Verbform [以下 V_{fin} と略す]) が来る。この位置 (定動詞第2位) は固定されている。この「定動詞第2位」は、現代アイスランド語や、現代ドイツ語で、守られている事をここで付言する。⁴ 用例は上記 (1) にもあるが、次例は *HSF* からである。

HSF 09711: Hallfreðr setti bú saman.

Hallfred set farm together

(Hallfred set up his homestead.)

非人称構文で、上記 (1) のような P1A, P1D, P1G, P1Präp が欠如している場合は、次例のように “það” (that)か “han” (he)かを補う。

það (Hann) rignir. (Kress [§ 637]のあげる例)

That (He) rains.

(It rains.)

(3) 主文の3番目の位置には関係を示す修飾語句
(Relationsbestimmungen [Reladv. と以下, 略す]) が来る。

HSF 09902-04: Hrafnkell elskaði eigi annat goð meir en Frey,
Hrafnkell loved not other gods more than Frey
....

(Hrafnkell loved no other god more than Frey,)

関係を示す修飾語句にどのような語句が含まれるかは、後の部分で扱う。

(4) 主文の4番目の位置には、動詞の名詞形 (不定形) (Nominalformen [infinite Formen] des Verbs [Infinitive und Parzipien]) (以下, Vinf と略す)。

HSF 09904-06: Hrafnkell byggði ..., en vilda þó vera yfirmaðr
Hrafnkell dwelled but wanted yet to be leader

þeira ok tók goðorð yfir þeim.
their and took "gooi" over them

(Hrafnkell settled ..., but wished to be their master all the same, and took the godord over them,)

ここで、一つ補足すべき事は、Vfin（定動詞）には、以下の助動詞も含まれる事である。即ち、“hafa” (= have), “vera” (= be), “verða” (= become), “munu” (= will), “skulu” (= shall), “geta” (= can), “þurfa” (= need), “vilja” (= want, will) などである。

(5) 主文の5番目の位置には、二つ目、三つ目の項目(P2, P3)が来る。この場合、P2, P3共にA, D, G, Präp.が来る。上の(4)にあげた例HSF 09904-06ではP2に補語が来ていた。次例ではP2Aの例である。

HSF 09902: Hrafnkell lét gera hof mikít.
Hrafnkel had build temple great

(..., and [Hrafnkel] had a great temple built.)

(6) 主文の6番目の位置には、場所, 時, 原因, 目的などの添加語 (Angaben über die lokale, temporale, kausale und finale Position [Poslok, Postemp, Poskaus, Posfin と以下, 略す] der Aktionen) が来る。これは、Reladv. と競合する。ここで使われている“Position” (位置) という用語はドイツの言語学者 H. J. Heringer の用語で、動詞の“Valenz” (結合価) によって生じる位置、及び、その位置を占める統語的要素の事を言う。⁵

HSF 09713-15: En um várit færði Hallfreðr bú sitt
But about the spring moved Hallfred farm his

norðr yfir heiði ok gerði bú þar, sem heitir
northwards before heath and made farm there which is called

í Geitdal.

Goatdale

(In the spring Hallfred shifted his dwelling northward over the heath and built a home at the place called Goatdale.)

この例では，“norðr”，“yfir heiði”，“þar”がPoslokの例である。

(3)のReladv.に入る語をKress (§ 643)は次のように分類する。具体的に分類された語は、以下では、その中の代表的な語だけをあげるに止めておく。

- ① 現実の行為との関係を示す語で、肯定とか否定を表す語が入る。
例：þó（それにもかかわらず），ekki（= not）など。
- ② 行為の頻繁性を示す語が入る。例：einu sinni（一回），oft（しばしば）など。
- ③ 文脈上、時間の関係を示す語が入る。例：nú（= now），þá（= then），síðan（= then）など。
- ④ 文脈上、原因の関係を示す語が入る。例：því（それだから），svo（それで）など。

この節では、古アイスランド語散文での語順の基本形を見た。次節では、以上、概説したKressの理論を論評したい。

3

この節では、Kressの語順の基本形について簡略ながら論評を加えたい。Kress以後のドイツでの依存関係文法の理論上の展開については、今後扱う事を目標としたい。ここでは、主に最近20年間の英国などの依存関係文法の理論に近い観点から、Kressの理論に論評を加える。

特に、Kressの「関係を示す修飾語句」と、「場所、時、原因、目的などの添加語」とを、ここで扱う。結論的に言うと、Kressの分類は、M.A.K.Halliday(1994)の機能文法の理論と近い。

前述したように、「場所、時、原因、目的などの添加語」は、「関係を示す修飾語句」と競合すると、Kressは説明する (§ 641)。Kressが2種類に分類する添加語と修飾語句とは、一般には言語学では、“Adjunct”(付加詞)として扱われる。以下、“Adjunct”を最近の英国系の言語学でどのように扱うか見たい。⁶

Richard Hudson (1990: pp. 244-250)は現代英語の“Adjunct”を扱う際に、特に、意味上の下位区分をしない。彼は、“Adjunct”を述語動詞の前の位置に来る“Predependent”(前位置依存)と、述語動詞の後の位置に来る“Postdependent”(後位置依存)との2種類だけに分類し、個々の副詞の機能(“function”)を別に記述する。例えば、否定の副詞“never”は、述語動詞の前の位置に来るが、述語動詞に対して文全体を修飾する機能はないと記述する。又、副詞の“though”は、述語動詞の後の位置に来る機能があるとする。このHudsonの分類(“Predependent”と“Postdependent”という分類)は、「定動詞第2位」が固定している古アイスランド語(これは現代アイスランド語や現代ドイツ語にも適用されるが)には適用できない。即ち、古アイスランド語では、語順の基本形では、述語動詞の前の位置には、主語(Kressでは“PIN”と表される)だけしか来ないのである。

しかし、機能文法のM.A.K. Halliday (1994: § § 4.3.2- 4.3.3)は、“Adjunct”

を機能と意味の上で次のように3種類に分類する(更に、その下位分類をもここで含める)。詳しくは、Hallidayの著書を参照してほしいが、その概略は以下のようである。

(1) Circumstantial (状況的)

(2) Modal (法的)

① Mood adjuncts (法の付加詞)

a Adjuncts of polarity and modality (極性と法性の付加詞)

(a) Polarity (極性): not, yes, no, so

(b) Probability (蓋然性): probably, possibly, perhaps etc.

(c) Usuality (通常性): usually, always, never, seldom etc.

(d) Readiness (進んで事を行う性質): willingly, readily, gladly etc.

(e) Obligation (義務性): definitely, absolutely, by all means

b Adjuncts of temporality (時間関係を示す付加詞)

(f) Time (時間): yet, still, already, once, soon, just

(g) Typicality (典型を示す): occasionally, generally, regularly, mainly
(更に細分化されているが、以下、省略する。)

② Comment adjuncts (評言の付加詞)

(3) Conjunctive (discourse)(接続的, 談話的)

ここで、Kressの「場所、時、原因、目的などの添加語」がHallidayの“Circumstantial”に該当すると考えられる。更に、Kressの“Reladv.”がHallidayの“Modal”に該当すると考えられる。Kress, Halliday共に、発話の内容に対する話者の態度を重視する立場である。そしてKressの分類を更に細分化すると、Hallidayの分類に到達すると、考えて良いであろう。この意味で、Hallidayの分類は古アイスランド語の分析に有効性が高い。

今後、Kress以後のドイツでの依存関係文法の理論上の展開を追跡し、それ

とHallidayなどの機能文法や、英国などでの依存関係文法の理論とを照合し、筆者なりの新たな理論的な枠組を構築したい。

次節では、古アイスランド語散文での語順の倒置を扱う。

4

この節では古アイスランド語散文での語順の倒置(Inversion)を扱う。

(1)平叙文の主文で、述語動詞(定動詞, Vfin)が文頭に来る事がある(Kress: § 644)。Vfinが語順の1番目に来るか、2番目に来るかは、かなりの程度、自由である。「PIN (主語) + Vfin」と「Vfin + PIN」との頻度を調べた結果によると、前者が後者より2倍、頻度が多いという報告がある。⁷

Heusler (§ 508)によると、「Vfin + PIN」の語順は特別な強調を示すのではなく、叙述上の「継続の語順」であるとの事である。述語動詞が当該の事件の継続を叙述する文の一部であり、その述語動詞が文頭に出ていると考えられ得る。この同じ事を、Haugen (§ 6.1.2)は、「語りの倒置」(narrative inversion)と呼ぶ。この倒置は、叙述(語り)と関係する現象である。

ここで、Heusler (§ 503)は独立の叙述文で、「Vfin + PIN」の語順を「動かされた習性の語順」(bewegte gewohnte Stellung)と呼び、それに対して、「PIN + Vfin」の語順を「定語順」(ruhend Stellung)と呼ぶ。即ち、「Vfin + PIN」の語順の倒置は頻度の大きい慣例化した語順であるという事である。⁸

用例を以下にあげる。

HSF 10216-17: Leitar Einarr um alla haga ok finnr
Seeks Einar around all pastured places and finds

eigi.

not

(Einar sought throughout the pastures, but did not find them,)

(2) 上記の(1)以外に、Vfin以外の主文の中の要素が文頭に来る倒置の例がある。P1やVfin以外の要素とはP2A, Reladv., Poslok, Vinf, Präd (Prädikativeの略である。述語内容語——補語の事), Postempの要素である(Kress: § 644)。ここで、P2とは項(Pol)が二つある場合の事を指す。

文頭にP1やVfin以外の要素が来る事について、Haugen (§ 6.1.2)は“highlighting elements of the predicate”と言う。この場合、“elements of the predicate”とは、“object, adjective, adverb”の事をHaugenは指示している。即ち、ここで、述語動詞以外の述部の要素を意味している。この「強調」(highlighting)を目的とする現象を、Haugenは“topicalization”(話題化)“foregrounding”(前景化)、“marking”(有標化)と言い換えている。

Kress (§ 644)は文頭に来る副詞として次の語をあげる。

- ① 場所を表す副詞：þar (= there), þarna (= there), þaðan (= from that place), her (= here), heðan (= from this place)。
- ② 関係を表す副詞：nú (= now), fyrst (= first), svo (= so), síðan (= then), þá (= then), þó (= yet), ekki (= not)。

以下、主文の語順の倒置で、Vfin以外の要素が文頭に来る例をあげる。

a P2Aが文頭に来る例：

HSF 09810-11: þetta veitir faðir hans honum,
This gives father his him

(His father gives this him.)

b Reladv. が文頭に来る例：

HSF 10401-02: Siðan tekr hann á mikilli rás ofan eptir
Then takes he in great hurry down along

gøtunum.

paths

(...; then off he went with a great rush down along the pathway.)

c Poslok が文頭に来る例：

HSF 09716-17: ‘þar liggr þú, Hallfreðr, ok
There lie you Hallfred and

(“There you lie, Hallfred —)

d Postemp が文頭に来る例：

HSF 10112-13: Einn dag tók Einar hest sinn ok reið á
One day took Einar horse his and rode to

Aðalból.

Manor

([One day] Einar now took his horse and rode to Manor.)

e Präd が文頭に来る例：

HSF 10019: þorbjörn hét maðr.
 Thorbjorn was called man

(There was a man named Thorbjorn.)

(3) 主文で接続詞 “ok” (= and) が文頭に来る時は、「ok + Vfin + P1N」の語順が多い(Heusler: § 510)。主文では「ok + P1N + Vfin」の語順はまれである。次例が「ok + Vfin + P1N」の用例である。

HSF 09721-09802: ..., ok týndusk þar þessir gripir.⁹
 and were lost there these animals

(..., and these animals perished there.)

この際，“ok”の直後の位置に副詞が来る事も多いが、この副詞が“ok”に続く語順は強調的な語順である(Heusler: § 510)。

HSF 09715-17: Ok eina nótt dreymsði hann,
 And one night dreamed he

(One night he dreamed)

更に、*HSF* では、接続詞 “en” (= but)の直後の位置でも語順の倒置の例が

多い。筆者の採集例では次例のように、「en + 副詞 + Vfin + PiN」の例がほとんどであった。

HSF 09713-15: En um varít fœrði Hallfreði bú sitt
But about the spring moved hallfred farm his

norðr yfir heiði ok
northwards before heath and

(In the spring Hallfred shifted his dwelling northwards over the heath and)

Kress (§ 651)が“en”の直後の位置では普通の語順と、語順の倒置の両方がある事に触れている事をここで補足する。

頻度は少ないが(“ok”の直後で倒置の例が21例、現れる中で、1例だけであるから)、“ok”の直後で語順の倒置が起こらない例が次のようにある。

HSF 09810-11: þetta veitir faðir hans honum, ok hann gerir
This gives father his him and he builds

sér bæ í dal þeim
for himself farm in dale the

(... his father granting him that, he built a homestead in that valley)

“ok”と“en”の後の位置での倒置で問題となるのは、次の事である。“ok”と“en”の後の位置では、ほぼ必ず語順の倒置が起こる。しかし、“ok”と“en”の直後に副詞類が来る場合、定動詞が文中で3番目に来るので、古アイスラ

ンド語での規則とも言える「定動詞第2位」の原則が破られる。この原則の破棄をどのように理解すべきかという問題が存在する。

この問題に関しては、“ok”と“en”とを数に入れないという解決策がある(森田貞雄：§ 37.3.1)。この考えを採用すると、古アイスランド語では“ok”と“en”とは文の要素として実質のない語となるが、このように考えてよいかどうか問題が残る。このような問題が“ok”と“en”を考察する場合に存在する事を指摘したい。

以上、この節では具体的な例をあげて語順の倒置の現象を見た。次節では、上記で分類した語順の倒置がどの程度の割合で *HSF* の中で生起するかを見たい。

5

前節で述べた語順の倒置現象が *HSF* の中でどのように生起しているか、この節で見たい。*HSF* の最初の第1行目から、語順の倒置の例を100例、集め、前節で設定した枠組で、その例を整理した。その結果は次の通りである。

語順の倒置の型	用例数 (計 100 例)
Vfin + P1N	21 (21%)
X + Vfin + P1N	41 (41%)
ok/ en + Vfin + P1N	38 (38%)

以下、上記の分類の内容を詳述する。

(1) 「Vfin + PIN」の場合。

Vfin を次の2種類に分けた。

- ①一般動詞：8例。
- ②助動詞：12例。

(2) 「X + Vfin + PIN」の場合。

この“X”は、具体的には次の項目である。

- ① P2A：4例。
- ② P2D：5例。
- ③ Präd：3例。
- ④ Reladv.：24例。
 - a 肯定、否定：5例。
 - b 行為の頻繁性、程度：1例。
 - c 時間：15例。
 - d 原因：3例。
- ⑤ Poslok：4例。
- ⑥ Postemp：1例。

④ Reladv.の「a 肯定、否定」に、Kress自身がこの下位分類の中に入れていない“ófuðs” (= unwillingly)を筆者は含めた。“ófuðs”は、Hallidayが示すような細分の枠組の中では分類できる語である。

(3) “ok”, “en” が主文の文頭に来る場合。

“ok” の例が21例, “en” の例が17例あった。その例を更に次のように分類できる。

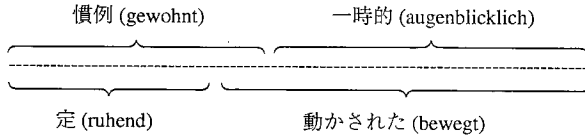
- ① ok + Vfin + P1N : 12 例。
- ② enda (= and) + Vfin + P1N : 1 例。
- ③ ok + Adv. (副詞) + Vfin + P1N : 7 例。
- ④ ok + P2A + Adv. + Vfin + P1N : 1 例。
- ⑤ en + Adv. + Vfin + P1N : 14 例。
- ⑥ en + P2D + Vfin + P1N : 2 例。
- ⑦ en + P2A + Vfin + P1N : 1 例。¹⁰

今回の調査では語順の倒置の例の100例だけを対象としたが、以上のような結果であった。Vfin 以外の主文の文の要素が文頭に来る語順の倒置の例が41%あった。次に、接続詞の“ok”や“en”が文頭に来る語順の倒置の例が38%あった。Vfin が文頭に来る語順の倒置の例は21%であった。

拙論は古アイスランド語散文の語順の基本形、語順の倒置、*HSF*での語順の倒置の分類の3点だけに限定して論述した。語順の倒置現象を引き起こす談話構造上の要因の分析は本論では扱わなかった。しかし、拙論で考察した古アイスランド語散文の語順の倒置と対比するために、古英語散文での語順の倒置を別の機会に扱いたい。又、語順の倒置を引き起こす談話構造上の要因を扱う際、話者 (= 作者) の内容提示の工夫——どのような形で内容を提示するか——を考察する必要があるであろう事をここで指摘したい。¹¹

注

- 1 『同志社大学英語英文学研究』66号(1996), 181-204. *Hrafnkels Saga Freysgoða*の成立年代は西暦13世紀末と考えられる。一番、最初の*HSF*の完全版は17世紀の紙製の写本として現存する。
- 前論文(1996)の発表の際に、その論文の査読者から古アイスランド語での倒置現象全般の中での関係詞節を伴う倒置現象の位置づけを質問された。その質問に不十分ながら、本論文が答えていると確信する。
- 2 *HSF*からの引用は次の版による。Jón Jóhannesson (ed.) *Austfirðinga Sögur* (vol. 11 of *Islensk Fornrit*) (Reykjavík: Hiði Islenska Fornritafelag, 1950), pp. 97-133. 引用の際、「10207-08」とある場合、上記の版のp. 102の7行から8行というように理解してほしい。「10920」はp. 109の20行である。「09709-10」はp. 97の9行から10行である。
- 現代英語訳は次の訳による。Gwyn Jones (trans.) *Four Icelandic Sagas* (New York: Princeton University Press, 1935). 原文の下の位置にある文法関係を明示するための直訳(英訳)は筆者による。
- 3 1970年代迄のドイツでの依存関係文法の展開については、ゲーアハルト・ヘルビヒ『近代言語学史』(岩崎英二郎他訳)(東京:白水社, 1972), pp. 188-206を参照の事。原本は、Gerhard Helbig: *Geschichte der neueren Sprachwissenschaft* (Leipzig: VEB Bibliographisches Institut, 1970)である。
- 4 森田貞雄『アイスランド語文法』§ 37.3.1, 桜井和子『改訂ドイツ広文典』(東京:第三書房, 1968) pp. 445 以下を参照の事。ドイツ語の語順の歴史の概説については、相良守峯『ドイツ語学概論』(東京:博友社, 1965), pp. 340-344を参照の事。
- 5 下宮忠雄他『言語学小辞典』(東京:同学社, 1985), p. 107 参照の事。
- 6 英国の言語学者 John Lyons (1977) と P.H. Matthews (1981) とにおける“Adjunct”の扱いは、次の拙論を参照の事。「古英語の文型 (S + V + O と S + V + O + A) について」, 『中世英文学への巡礼の道(齋藤勇教授還暦記念論文集)』(二村宏江他編)(東京:南雲堂, 1993), pp. 452-455.
- 7 Haugen: § 6.1.2 参照。
- 8 Heusler (§ 502)は語順を考える際に、「定」(ruhend), 「動かされた」(bewegt), 「慣例」(gewohnt), 「一時的な」(augenblicklich) という四つの概念を導入する。次のような図式でこれらの概念を彼は説明する。



この場合，“gewohnt”は“habituel, usuel”（慣例の）と，“augenblicklich”は“okkasionell”（一時的な）と，“ruhend”は“gerader”（基本形）と，“bewegt”は“ungrade invertierter”（倒置）と同義だと、彼は説明する。上の図式で，“gewohnt”と“ruhend”とは重なるの割合が大きく、更に，“augenblicklich”と“bewegt”とは重なるの割合が大きい。しかし、一部だが，“gewohnt”と“bewegt”とが重なる事に注意を払いたい。

以上の事から「Vfin + PIN」の倒置の語順は、古アイスランド語散文では、慣習と見なす事ができる程に頻度が高いという事が分かる。

- 9 この例のように，“ok”の直後の位置に明示的に主語と述語動詞が来る時は，“ok”以下を独立文と見なした。即ち，“ok”の直前で、その前の文は統語論上、完結したと見なした。そして，“ok”を主文の文頭と見なした。

- 10 具体的に、HSFの行数を以下に示す。

(1) Vfin + PIN (21例)

- ①一般動詞 (9例): 09813, 09918-19, 10216-17, 10220-21, 10317-18, 10320-23, 10714-15, 10727-28, 10802
 ②助動詞 (12例): (hafa) 10502-04, 10525-27, 10628-10701; (munu) 10527-10602, 10604-06, 10614-15, 10721-22; (skulu) 10613-14, 10615-16; (vilja) 10616-17, 10702-03; (vera) 10707

(2) X + Vfin + PIN (41例)

- ①P2A (4例): 09810-11, 10125, 10423-24, 10608-10
 ②P2D (5例): 09916-18, 10016-18, 10201, 10205-06, 10315-17
 ③Präd (3例): 10019, 10416-19, 10725-26
 ④Reladv. (24例)
 a 肯定, 否定: (eigi= not) 10106-07, 10415, 10717-19; (þó= yet) 10804-06; (óþúss= unwillingly) 10806-07
 b 程度, 頻繁性: (meira= more) 10107-08
 c 時間 (15例)
 (a) nú (= now): 10209, 10307-11, 10519-21, 10719-21
 (b) þá (= then): 09804-05, 10407, 10424-25, 10620-21, 10621-22
 (c) síðan (= then): 10401-02, 10416-19, 10513-14
 (d) eptir þat (= after that): 09718-21, 10512-13

(e) of sið (= too late): 10110-12

d 原因: 09906-08, 10607-08, 10726-27

⑤ Poslok (4例): (par= there) 09716-17, 09718, 10508-09; (paðan = from that place) 10010-12

⑥ Postemp (1例): (einn dag= one day) 10112-13

(3) “ok”/“en” + Vfin + P1N (38例)

① ok + Vfin + P1N (12例): 09721-09802, 09808-09, 10002-04, 10302-04, 10320-23, 10402-05, 10416-19, 10516-17, 10525-27, 10620-21, 10626-28, 10705-06

② enda + Vfin + P1N (1例): 10722-24

③ ok + Adv. + Vfin + P1N (7例): 09711-09713, 09715-17, 09721-09802, 10302-04, 10325-10401, 10407-08, 10602-04

④ ok + P2A + Adv. + Vfin + P1N (1例): 10610-13

⑤ en + Adv. + Vfin + P1N (14例): 09713-15, 09808-09, 09813-09902, 09914-16, 10117-18, 10125-27, 10221-22, 10318-20, 10416-19, 10421-23, 10508-09, 10510-12, 10524-25, 10626-28

⑥ en + P2D + Vfin + P1N (2例): 09721, 10103-06

⑦ en + P2A + Vfin + P1N (1例): 10201-05

11 ほば筆者と同じ趣旨の事を、英語の“extraction”（抽出）に関して Richard Hudson (1990: p. 361) が次のように述べている。

“Roughly speaking, I [Richard Hudson] am suggesting no more than that the reason for putting some word before the main verb is that it suits the speaker’s purposes to do so; but then it must be treated either as the verb’s subject, or as an extractee, according to how the speaker plans out the rest of the message.”

査読者の指摘により、Kressの理論とRichard HudsonやM.A.K. Hallidayの理論との比較の部分新たに加え、全体的に内容に補筆をした。査読者にこの場を借りて感謝を示したい。

References

- Halliday, M.A.K. *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd edition; London, Melbourne and Auckland: Edward Arnold, 1994
- Haugen, Einar. *Scandinavian Language Structure: A Comparative Historical Survey*. Tübingen: Max Niemeyer, 1982.
- Heusler, A. *Altisländisches Elementarbuch*. Heidelberg: Carl Winter, 1964.

- Hudson, Richard. *English Word Grammar*. Oxford: Basil Blackwell Ltd, 1990.
- Kress, Bruno. *Isländische Grammatik*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie Leipzig, 1982.
- Lyons, John. *Semantics*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 1977.
- Matthews, P.H. *Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981.
- 森田貞雄 『アイスランド語文法』 東京：大学書林，1981.

Synopsis

Inversion in the Main Clauses of *Hrafnkels Saga Freysgoða*, an Old Icelandic Saga

Hideho Ida

In this paper, the writer investigates how “inversion” took place in the main clauses of the sentences of *Hrafnkels Saga Freysgoða*. He extracted one hundred examples of “inversion” from the sentences in the first part of this text and classified them into three categories using Bruno Kress’s method of classification. In the traditional grammar, P1N and Vfin represent the subject and the predicate verb of a sentence respectively. The result of this investigation is summarized as follows with some sub-categories established:

1 Vfin + P1N: twenty one examples (twenty one per cent)

“Vfin” is grouped into the following two types:

- (1) Auxiliary verbs: twelve examples
- (2) Other verbs than (1): nine examples

2 X + Vfin + P1N: forty one examples (forty one per cent)

“X” is grouped into the following six types:

- (1) “Pol2 Akkusativ” [P2A]: four examples
- (2) “Pol2 Dativ” [P2D]: five examples
- (3) “Prädikativ” [Präd]: three examples
- (4) “Relationsbestimmungen” [Reladv.]: twenty four examples
 - ① Affirmation or negation: five examples

② Degree: one example

③ Time: fifteen examples

④ Cause: three examples

(5) “Angaben über die lokale Position” [Poslok]: four examples

(6) “Angaben über die temporale Position” [Postemp]: one example

3 ok (= and)/ en (= but) + Vfin + P1N: thirty eight examples (thirty eight per cent)

This is grouped into the following seven types:

(1) ok + Vfin + P1N: twelve examples

(2) enda (= and) + Vfin + P1N: one example

(3) ok + Adverb [Adv.] + Vfin + P1N: seven examples

(4) ok + P2A + Adv. + Vfin + P1N: one example

(5) en + Adv. + Vfin + P1N: fourteen examples

(6) en + P2D + Vfin + P1N: two examples

(7) en + P2A + Vfin + P1N: one example